

信州読書会 ツイキャス読書会 課題図書

村上春樹『騎士団長殺し第2部 遷ろうメタファー編』

信州読書会では、二週に一度、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を800字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『Column Bar 信州 及び ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCv5e0gxXpE28Mbd0A1iGz2R>

(感想文は動画の下の説明欄にPDFへのリンクを張ってあります。)



村上春樹『騎士団長殺し』読書会

第16回のツイキャス読書会の課題図書は、村上春樹『騎士団長殺し第2部 遷ろうメタファー編』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます

秋川まりえの肖像画を制作しながら、免色との交流を深める私は、雨田具彦が留学先のウィーンで巻き込まれた事件と、彼の弟である継彦が徴兵され、除隊した後に、自殺した事実を知る。どちらも戦争に関わる事情が背景にあった。ある夜、アトリエに雨田具彦の生き霊があらわれる。そして、秋川まりえが行方不明になる。（彼女は免色の家に、4日間隠れていた）私は、息子の雨田政彦に生き霊のことを話す。また、政彦から、ユズの交際相手の話を打ち明けられる。彼の同僚が、ユズの浮気相手だということがわかる。彼女は、妊娠7ヶ月であったが、7ヶ月遡ると、旅先の夢の中で、私がユズを無理矢理に犯した日だった。それは免色が秋川まりえの母と体験した出来事と、奇妙な対を成していた。論理的には、ユズの妊娠している子は自分の子供ではないが、自分の子だと信じる決意をする。雨田政彦とともに、高齢者介護施設で、痴呆状態となってベッドに横たわる雨田を訪ねる。政彦が席を外すと、騎士団長が顕れる。彼は雨田具彦がウィーンで体験したナチスの精神的拷問を語り、世界の流れに抗うことのできない個人の無力感・絶望感が、『騎士団長殺し』を描かせたと語る。そして、騎士団長は、彼の人生の終わりにあたって、もう一度『騎士団長殺し』を再演するように、私に命じる。私は、雨田具彦の前で、騎士団長を刺殺し、彼はベッドの上でそれを直視する。そして、絵のとおり、部屋の片隅に現れた「顔なが」を生け捕りにし、顔ながの隠れていた地下のメタファーの世界に秋川まりえを探しに行く。やがて川があらわれ、顔のない男がいた。秋川まりえの携帯ストラップを、彼に渡し、船でメタファーの世界の川を渡った。森を抜け洞窟にたどりつくと、ドント・アンナがいた。自分の中にありながら自分の正しい思いを貪り食う「二重メタファー」は、白いスバル・フォレスター男だと悟る。（それは、まあ、これを描いている私の意見だが、要するに、自己欺瞞（いいわけや自己正当化）のことだと思われる。）自己欺瞞をやめるために、ドント・アンナは『手で触れられるものを、すぐに絵に描けるようなもの』を思い出するようにアドバイスする。メタファーに締付けられながら、「光は影であり、影は光なのだ」という認識を得ると、雨田具彦の庭の石室の中にいることに気がついた。彼は、免色によって、石室から救出される。秋川まりえに再会すると、彼女も、忍び込んだ免色の家で、騎士団長にあったことがあるという。彼の母の洋服のしまっているクローゼットであった。そこで、誰かに見つかりそうになり、母の衣服に護られたという。『騎士団長殺し』は雨田具彦の鎮魂の絵であったことを、彼女に言い聴かせ、『白いスバル・フォレスター男』の絵とともに屋根裏にしまった。雨田具彦は死に、私はユズが離婚の意志がないのを確認して、再び、ともに生活することになる。やがて生まれた娘に『室』という名前をつける。雨田具彦の家は火事で全焼する。

（おわり）

『そういえば最近、空気圧を測ったことがなかった』

免色さんは、グレート・ギャツビーとアメリカン・サイコの主人公を足したような新しいキャラクターだと思いました。

秋川まりえとその叔母が免色さんの暴走のブレーキ役になっているのかもしれませんが。

今回の作品は、初めて自分の子どもが生まれて(1084 は妊娠したまで。)、保育園に迎えに行く普通の父親を描いたと思いました。

また、白いスバル・フォレスターの男は、3・11 の災害でもあり、おまえがなにをしているのかわかっているぞと監視しているビッグブラザー的であり、首を絞めてと頼まれた時の主人公であり、クローゼットの前に立っていた免色のもう一つの姿であり、誰もが持っている邪悪な心のメタファーなのかなと思いました。

戦争というシステムに対しての抗えない雨田継彦(雨田具彦の弟)の体験は、もしかしたら、村上春樹さんの父親が体験したことなのかもしれないなと思いました。

(おわり)

イノマンさんのブログです。 『イノマンブログ』 <http://ameblo.jp/inoman-1984/>

『騎士団長殺し』 第二部感想

第二部になるとますます不思議な世界が広がっていて、とにかく最後まで読まないといけない感じがしませんでした。

私という男は、第一部では少し頼りないような、生きる力が薄いような男としてあまり魅力を感じない人でした。

まりえという少女を助けるために必死になり、不得意な暗い場所にも怯むこと無く進んで行く所が頼もしくてすごく男らしくてステキな男性に思えました。まるで別人になったような、生まれ変わったのだと私は思いました。生きた目になったのだと思う。二部を読んで、一部で描かれていた私という男はきっと生きた目はしていなかったように思います。

生まれ変わった男は(私がそう思うだけですが)柚と連絡を取る決意もできて私は離婚したと勘違いしていましたが、元に戻る事ができて、娘の『むろ』と三人で穏やかに暮らしている様子が分かりほっとしました。私の望む行く先だったので嬉しかったです。

きっと「むろ」は、私という男の子供だと私は信じています。

まりえと私という男だけの秘密を知っている騎士団長殺しの絵が失われたのはすごく残念な気がするけど、きっと持ち主の雨田具彦の元に戻った気がしたし、あの絵の役目はもう終えた気がしました。

最後、『私の心の中で、その雨が、降り止むことはない。』とあったので早く雨上がりを見てみたいと思いました。

(おわり)

『二重メタファー』

人間は自由意志で生きているのではなく、何かに生かされているのだ。そういうテーマの小説だと思った。欧米の小説だと、キリスト教が主題になるが、村上春樹は、キリスト教なしで、キリスト教的なテーマを描く。アイデアは、頭の中の世界、メタファーは、現実と頭の中の世界を繋ぐものという言う意味だろう。邪悪なものとして『二重メタファー』というのが出てくるが、これはジョージ・オーウェルの『1984年』の『二重思考（ダブルシンク）』に似た概念だ。あの小説では『戦争は平和なり。自由は隷従なり。無知は力なり』というスローガンで表現されていたが、『騎士団投長殺し』では、『白いスバル・フォレスター男』として『二重メタファー』は、表現されている。良心のとがめるようなことを人間が、誰かに見られているのではないかと、意識するその視点は、キリスト教で言えば、神の視点なのだが、神っていう概念出すと、一神教ではない日本では、なかなか受け入れられない。『おまえがどこでなにをしていたかはおれにはちゃんとわかっているぞ』という意識を、地震という自然現象によって体験させなければ、因果を理解できない。地震は、人間の自己欺瞞を暴露する力を持っている。人間は、自然に生かされている。その認識が、薄れていくと、『目に見えるもの、手で触れるもの』をどんどん粗末し扱ってしまう。それが、すすむと、人間は自己欺瞞に深く陥って、邪悪になる。大量虐殺を正当化するまでの自己欺瞞というのは、『二重メタファー』のなせる業である。『安全保障』という言葉は、「戦争は平和でなり」という二重メタファーである。『反テロのための治安強化』は、自由が隷従であることを意味している。『本を読まないのを恥じない』とは、無知の力のことである。現実社会は、『二重メタファー』という自己欺瞞で、汚れきっている。『騎士団長殺し』は、邪悪な『二重メタファー』の犠牲になった人間を鎮魂した絵であった。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>